

生徒が主体的に関われる社会科学習をめざして
～公民分野・ディベートで授業の活性化を考える～

目 次

I	テーマ設定理由	129
II	研究課題	129
III	本校3年生の実態調査	130
IV	研究仮説	132
V	研究内容	132
	(1) 主体的に関わって生きる人間をどう育てるか	132
	(2) 課題を追求・解決する学習について	133
	(3) 主体的学習につなげる授業方法として—ディベート	133
	(4) 授業観	133
	(5) 学習環境作りについて	133
	(6) 評価について	133
	(7) 学習の形態について	134
	(8) 公民分野の全体像とディベート授業の位置づけ	134
	(9) 学習活動をノートに記録する訓練と工夫	134
VI	授業の活性化を図る — ディベートについて	135
VII	授業実践（検証授業）	139
VIII	授業実践の記録と考察	142
XI	まとめと今後の課題	147
X	参考文献・引用文献	147

浦添市立港川中学校教諭

嘉手納 千賀子

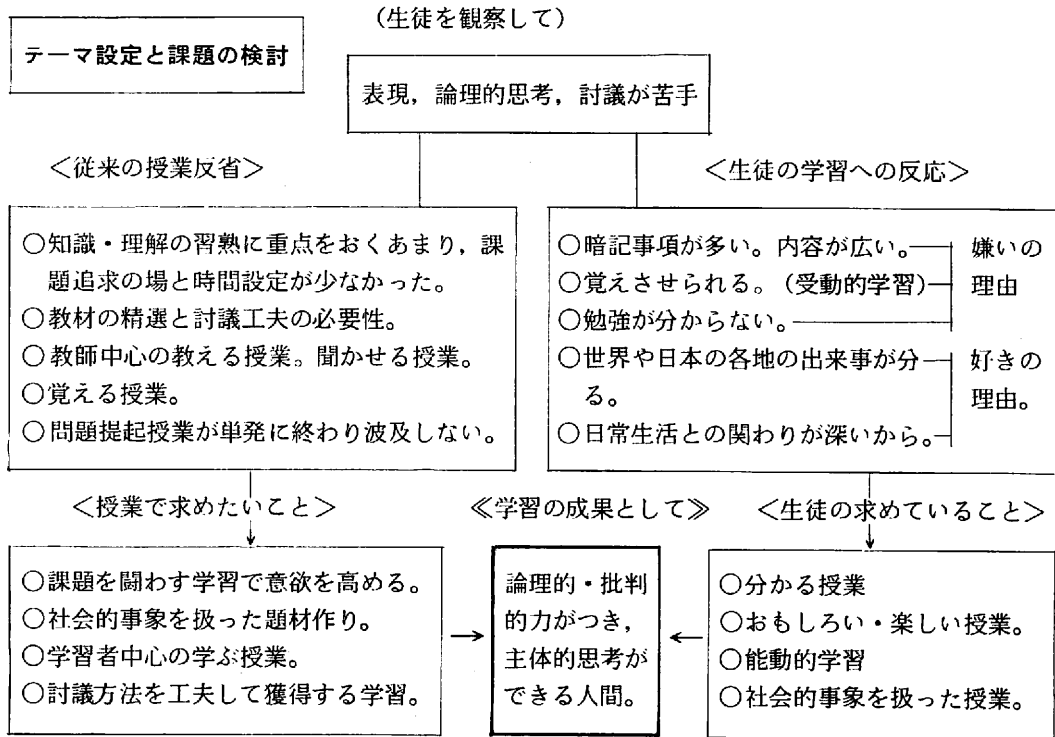
生徒が主体的に関われる社会科学習をめざして

～ 公民分野・ディベートで授業の活性化を考える～

浦添市立港川中学校教諭 嘉手納 千賀子

I テーマ設定理由

急激なテンポで変動する多様化社会において、常に自己実現を図っていく人間をどう育成していくか。社会科学の果たす役割は大きい。「国際社会に生きる」の文言を附加挿入する形で改定された学習指導要領の社会科学目標をみると「広い視野に立って、我が国の国土と歴史に対する理解を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる民主的・平和的な国家、社会の形成者としての必要な公民的資質の基礎を養う。」となっている。本校の教育目標の一つ「確かな判断」と併せて、社会の変化に主体的に関われる人間の育成をめざし、授業づくりを考えたい。



II 研究課題

- (1) 価値葛藤の場面を設定した、課題追求学習のできる授業工夫。
- (2) 発表や意見創りを助ける学習環境作りとノートの使い方の工夫。
- (3) 普段の学習活動や生徒にもみえる評価の工夫。

Ⅲ 本校三年生の実態調査 3クラス（1993年5月実施）

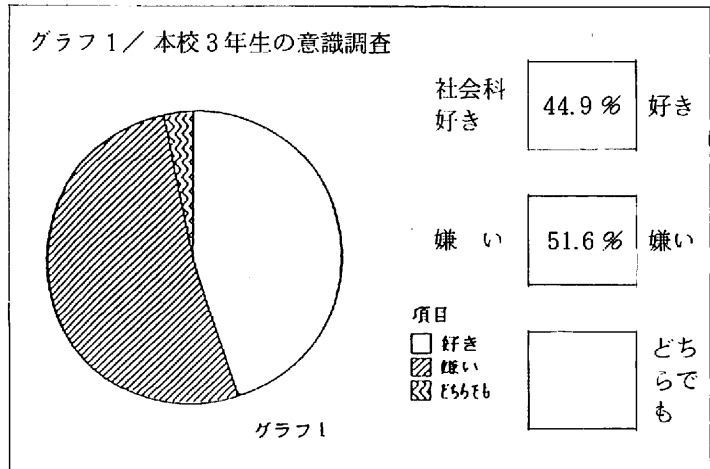
- (1) アンケートの回収率80%であった。
- (2) 直接授業に関わるクラスについて、アンケートを実施。
- (3) アンケートの方法は、10年前那覇市立教育研究所からだされた調査結果と、比較参考にするという事でそれを利用させてもらった。

《分析》と《考察》

グラフ1

- (1) 社会科嫌いは、過半数いる。

他県で実施した最近のアンケートの社会科嫌い37%からすると、本校は45%でかなり高くなっている。また、全体として社会科嫌い・社会科離れの傾向が高くなっていると報告されている。

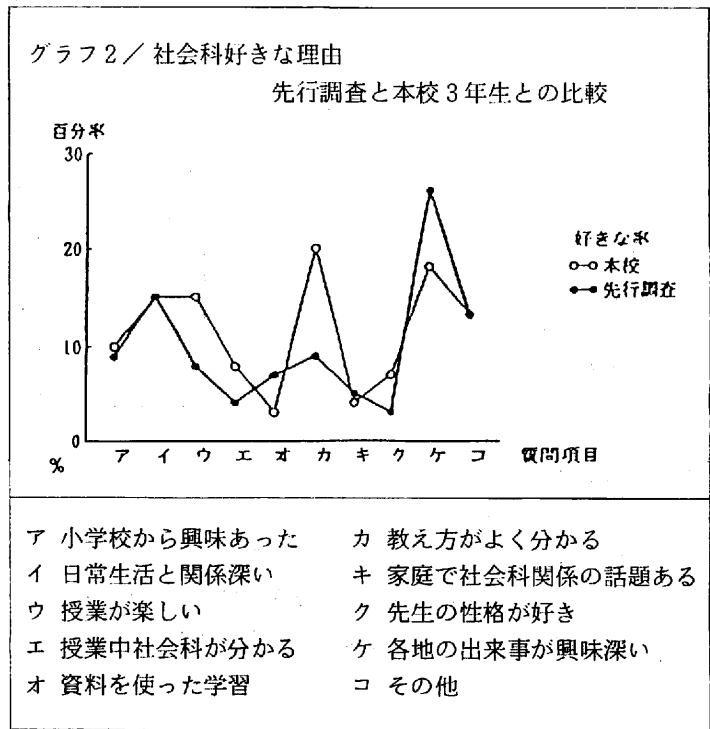


グラフ2・グラフ3

- (2) 社会科好きな理由をみると、先行調査ともに、ほぼ同じである。

1位・先生の教え方がよく分かるから。2位・世界や日本の各地のできごとがわかって興味深いから。3位・先生が冗談をいったり、おもしろい話をして授業が楽しいから。4位・テレビ、新聞のニュースなど日常生活との関わりが深いから、が多くなっている。

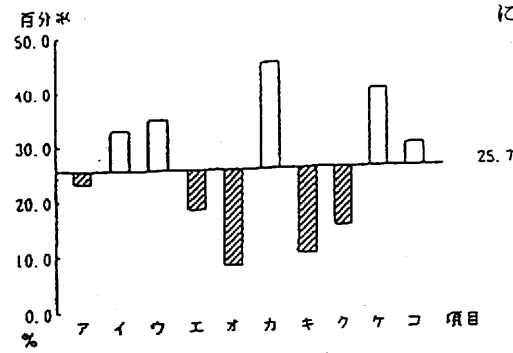
生徒は社会の傍観者であるよりも、積極的に社会と関わりを持ちながら、学習をしたいと望んでいる。受動的学習から、能動的学習への授業展開を、考える必要がある。



グラフ 4

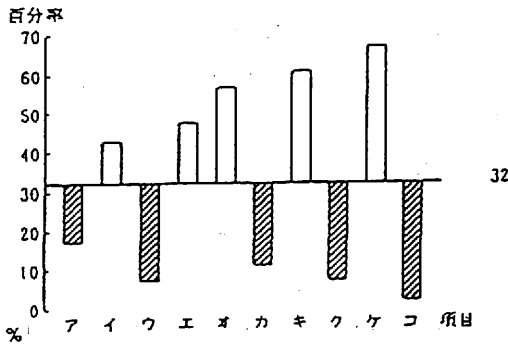
(3) 社会科嫌いの理由は、内容が広く、暗記が多い。勉強が分からないというのが多い。社会科本来の目的からすると社会科学習は、知識理解で留まってはならない。社会科学的思考力・判断力といった自己実現を図ろうとする、態度育成につながるものでなければならない。

グラフ 3 / 本校の社会科好きな理由 (好きな人数中の%)
複数解答可 項目は 2 頁に同じ



グラフ 4 / 本校の社会科嫌いの理由 (嫌いの人数中の%)

複数解答可

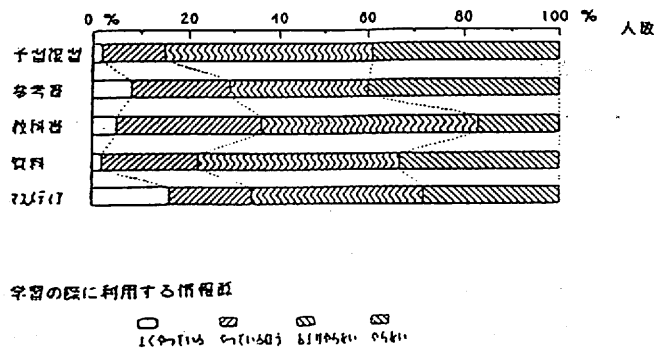


- ア 小学校から嫌い。
- イ 学習内容が広い勉強が多い。
- ウ おもしろい話をしないで退屈。
- エ 社会科がよくわからない。
- オ 学習する内容や語句がむづかしい。
- カ 教え方がわかりにくい。
- キ 勉強方法がわからない。
- ク せんせいと気があわない。
- ケ 覚えることが多い。
- コ その他

グラフ 5

(4) 「あなたは家庭学習は、どのようにやっていますか。」についてはほとんどの生徒は予習・復習があまりなされていない。教科書を読んで授業にのぞむ生徒は全体の約30%程度であり、教科書を読んで授業参加するような課題の与え方を考える必要がある。「テレビ・新聞等で社会科に関係あるものを見るようにしていますか。」については多くの生徒がよくみているようで、他の項目と比べると高くなっている。

グラフ 5 / 本校 3 年生の家庭学習の方法



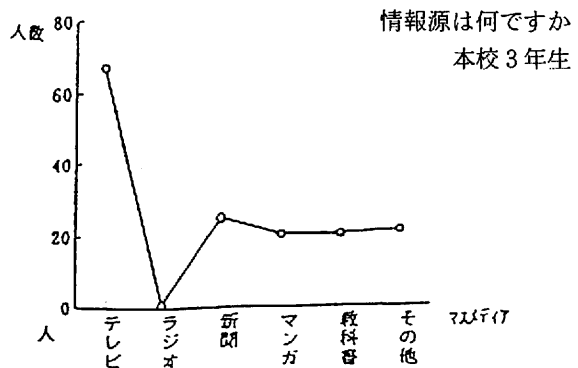
(5) グラフ 6

「あなたに影響を与えている情報源は何ですか。」の問いには、テレビが圧倒的に多い。ラジオは生徒の情報源として最も少ない。又教科書がマンガ並の影響しかないというのは以外であった。マンガの魅力が大きいのだろう。

生徒に強く影響を与えている情報源からすると、圧倒的に多かったテレビに教材をもとめた方がよいかも。しかし、映像的

資料は感性に訴えるには効果があるだろうが、じっくり立ち止まって考え、問題と向き合うには文字の方が何度も読み返し深く捉えることができる。そこで、価値葛藤のできる学習展開を考えた場合、2位の新聞に教材資料を求めたい。時事問題の教材化については、マスコミでもよく取り上げられ、身に迫る問題、しかも価値が社会で揺れ動いているものが、妥当と考える。新聞では人権に関する記事が日常的に取り上げられている。人権に関する問題は、生徒がこれまでの生活経験や、既習の学習をふまえれば判断できそうなものでもある。生徒の視点で捉え返せる資料=情報を大いに活用していく必要を感じる。

グラフ 6 / あなたの考え方に影響を与えている



IV 研究仮説

- (1) 主体的学習の態度を育てるには、社会的事象を子供の生活（社会的認識）と結び付け、常に問題意識が持てるようにすると、能動的・自発的学習ができるようになるだろう。
- (2) 自分のコメントを添えるノート作りで、論理的・批判的思考力がつき、かつ、自己変容と向上心につながるができるであろう。
- (3) 生徒にも、見える評価を工夫する事で、学習意欲は喚起されるだろう。

V 研究内容

(1) 主体的に関わって生きる人間を、どう育てるか

「公民」学習のねらいは、主権者意識を育てることである。主権者意識を育てるには、民主主義の知識・理解だけでは難しい。ひとりひとりが、主権者として社会に働きかけること、国の主権者として、ふさわしい力を身につけることである。政治や社会の出来事に自分なりの考え（意見）を持つこと。その為には、社会のしくみや事実を学び、人の考えを学び、自分なりの考えを形成することである。常に、社会的事象に関心を持ち、課題をもって生きる態度が主体的人間でもある。学習者の意識にねざした授業を創り、学習者中心の授業を展開していかなければならない。

(2) 課題を追求・解決する学習について

課題を追求していくためには、その技術としての力が必要である。情報を収集して分析する力、それを筋道立てて問ひかけ、論ずる思考力・表現力である。これらは、「自ら学ぶ」という教育に必要な力であり、授業で育てたい力である。この学力は、発表や討議学習のなかで育つものである。既習の知識を駆使して討議し、困難なときは、もっと情報を収集し知識を身につけたいという、「自ら学ぶ」主体的学習にもつながる。課題追求をする授業のスタイルは、これに応じていくものでなければならない。

(3) 主体的学習につなげる学習方法として — ディベート

主体的学習につなげる授業として、課題発見・討議による解決学習があるが、討議のいきづまりを打破して、授業の活性化を図る方法として、ディベートによる討議をとり入れる。

「ディベートは目的ではない」討議の活性化や主体的学習につなげる一つの学習形態である。

(4) 授業観

社会的事象と生徒の社会的意識（物の見方や考え方）とを結び付けることを大切に授業をする。将来の社会の担い手として「どう生きるか」という意思決定の方法・技術を知る。課題追求の討議では、その仕掛けをしていくこと。その意味では、社会事象即ち、「時事問題」という教材をとうして、社会科の教育内容を教えていくことは大切であるとする。

(5) 学習環境作りについて

- 発表や討議の時「誰が言ったか」ではなく、誰が「どんな意見を言ったか」に、生徒の関心がおかれるように配慮していく。即ち、意見が意見として正当に評価される討議の場をつくること。
- 教室の学習環境作りとして、一角に「今日のニュース」コーナー設け、新聞の話題を掲示する等常に、社会的事象に関心をはらえるように心掛けていくことも大切である。

(6) 評価について

自己変容を図れる学習がどんなに大切な事であっても、受験や評価をされる生徒にとって目の前のテストというハードルは無事越えたいものである。人は評価によって意欲を高めるものでもある。何を評価するかで目標の持ち方も変わるならば、評価方法の責任は相当大きいと考える。学習活動を評価で保障してあげる。学習における活動と評価を一致させないと授業のねらいをどんなにいても意味をなさなくなる。学習後は成就感や向上心の面から、そのつど評価をする必要がある。

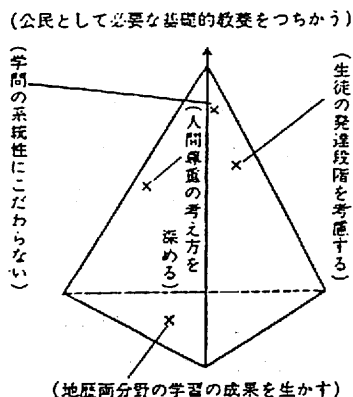
(7) 学習の形態について

集団による生徒の知識理解や思考の高まりは、小集団リーダーが育っていない限り、中間児や、それに次ぐ生徒の伸びは、学級集団の方がより効果的である場合がある。また、その時

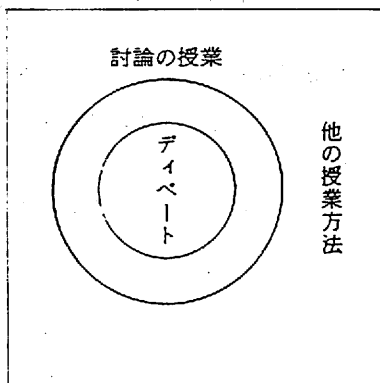
辺級の生徒の劣等感も低減されるようである。従って、個人学習と学級集団による相互学習を採り入れながら、価値葛藤の場面を通して、より高い価値を追求する学習姿勢を育てたい。

(8) 公民分野の全体像とディベート授業の位置づけ

① 公民的分野の全体像



② <授業方法>



- ① 能動的な学習展開を創造していくには、多様な単元構成を工夫していくこと。
- ② 獲得する知識を獲得した知識で深められるような、ディベート授業の位置づけをする。

(9) 学習活動をノートに記録する訓練と工夫

★ ノートに書く理由 — 学習者

- 自分や人の考えを書くことによって、集中力や緊張感をもって授業にのぞむことができる。
- 書く活動をとうして、学習に深まりができ、学習の定着も推進されていく。
- 書くことによって、自分の考えを整理し、客観的にながめ、発表をしやすくする。
- ニュースを集め自分のコメントをつけることで、社会的事象への関心が高められる。

★ ノートに書く作業をさせる理由 — 評価者

- 学習への集中力を高めることができる。
- みんなの前で、発表することが苦手であっても、学習結果を評価してあげられる。
- 思考過程が現れたノートに目を通すことによって、教師の生徒援助がしやすい。
- 学習への意欲、深まり、学習後の変容がつかめ、評価がしやすくなる。

★ ノートの使い方訓練

1. 学習の期日を明確にするために、月日を記入する。
2. 学習方法を明確にするため、学習課題と方法分析を記入する。
3. 授業で発表できるように、分かったこと、疑問点、問題点、困難点をはっきりさせる。
4. 修正事項や学習事項を記入するための余白を残す。
5. 学習したことのなかで、重要な事項や必ず記入すべき事項には、はっきりと印を入れる。
6. 自分で学習したことの訂正や補充などは消さずに残し、後で振り返られる工夫をする。
7. 新聞等のニュースを紹介する欄を設け、そのつど自分のコメントを必ず入れるようにする。

<ノートの使用例>

月	日	曜日	家庭 1 課題に対する意見, 結論 学習 2 疑問点, 問題点, 困難点 3 課題の分析
学校での学習記録		重要な語句	私の選んだニュース・コメント
			<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="text-align: center;">新聞から選ぶ (切り抜き可)</td> <td style="text-align: center;">必ず意見を添える</td> </tr> </table>
新聞から選ぶ (切り抜き可)	必ず意見を添える		

VI 授業の活性化を図る——Debate について

(1) ディベート学習を採り入れる理由

社会認識を深め、社会事象に主体的に関わっていくには、「話し合い・討論」の学習形態は不可欠である。しかし、一斉授業に慣らされていると、課題把握まではよいが、発問しても討論がうまく続かず、また追求されると、発言することを放棄してしまいがちである。なかなか、討議の面白さを体験させるまでに至れない。そこで、これまでの行き詰まった、討論学習の活性化を図り、かつディベートで討論するときのメリットの大きさを考えて、ディベート学習をとり入れる。

(2) ディベートの定義

「論題の採決をめぐる、対抗する肯定側・否定側の二組の間で論争する。討議法の一形態である」論題に対する論証方を争い、最後に勝敗を決め判定をする等、一定のルールに基づいて行う討議。

(3) 討論の段階論

ディベート学習には2つの段階がある。

① 「ディベートを教える」段階 (目的としてのディベート)

- 討論の方法を教えることを目的としている, 形式的討論。
- 討論のおもしろさを知り, 意欲を持たせる。
- 討論についての討論の段階。

② 「ディベートで教える」段階 (方法としてのディベート)

- ディベートという方法を使って内容を討論させる, 実質的討論。
- 課題追求・解決のために, ディベートする。

★ どちらも目的は, 討論を活性化するためである。

(4) ディベートは, ルールに基づいて行う討論である

1. ある一つの論題「AはBである」という命題のもとに行う。
2. 形式的に対立する二組の間で行われる。(肯定側 — 否定側)
3. 立論・反対尋問・最終弁論の3つの要素が必要である。(論証)
4. それぞれ, 持ち時間を決める。
5. 最後は, なんらかの形で判定(勝負)評価される。

※ 4.5.が他の討論とは違うディベートの特徴である。

ルール1. 論題を決める……………5つの条件

- ① 話題性がある。確定した答えは不適格
- ② 中心的課題は, 一つを扱う。
- ③ 感情的表現は避ける。
- ④ 抽象的表現は避ける。
- ⑤ 重大な変化をもたらすもの。

<例>

「死刑制度は廃止されるべきである」
これを、「非人道的・残酷な死刑制度は」と、抽象的・客観的表現を用いる事を避ける。

- ☆ 論題の種類
- 推定論題……可能性の高い事実を対象「国連は有効に機能しているか」
 - と「例」
 - 価値論題……価値論は比較が不可欠「国民の権利は国家安全保障より重要」
 - 政策論題……現状変更の必要性を問う「日本は外国労働者を受け入れるべき」

ルール2. 形式的に肯定側と否定側の二つの立場を決めて, 対決論争する。

<方法, 組み合わせはいろいろある>

- 一 例
- ① クラス全体を二つに分ける。
 - ② 5~6人のチーム制。
 - ③ 一人対一人でやらせる。

* 残りはどちらが, 優れているかを評価
(判定)する審査員になる(②③)

ルール3. 立論・反対尋問・最終弁論の3つの要素が必要である。

- ① <立論> 論題に対して「なぜ……である」
- ② <反対尋問> 相手の主張のどこが、可笑しいと相互に述べたり、確認のための質問をする。
- ③ <最終弁論> 相手の批判をふまえて、もう一度自分達の正当性を主張する。

ルール4. 持ち時間を決める { ① 持ち時間は、生徒やその実態にあわせて決める。
 ② 重要なことは、肯定側・否定側に同じ持ち時間を与える。
 ③ 時間が短いと、スピーディで緊迫感がある。

<進行方法の例>

<持ち時間例>

1	肯定側「立論」
2	否定側「立論」
3	<作戦タイム>
4	否定側「反論」
5	肯定側「反論」
6	否定側「最終弁論」
7	肯定側「最終弁論」

1	肯定側「立論」
2	否定側による尋問
3	否定側「立論」
4	肯定側による尋問
5	<作戦たいむ>問
6	否定側「最終弁論」
7	肯定側「最終弁論」

1	肯定側「立論」
2	否定側「立論」
3	否定側「反対尋問」
4	肯定側「反対尋問」

立論
3～5分

反論
3～7分

作戦タイム
1～3分

[基本型ディベート]

[尋問型ディベート]

[最終弁論なしのディベート]

ルール5. 最後に勝敗(判定)を決める。 <例・評価表>

	評価の基準	肯定例	否定例
立論	・話の筋道が通っている	1 3 5	1 3 5
	・言葉がはっきりしている	1 3 5	1 3 5
	・説得力ある態度・声	1 3 5	1 3 5
反論	・質問に筋道が通っている	1 3 5	1 3 5
	・応答に筋道が通っている	1 3 5	1 3 5
	・攻勢的で活発で有る	1 3 5	1 3 5
最終弁論	・話の筋道が通っている	1 3 5	1 3 5
	・言葉がはっきりしている	1 3 5	1 3 5
	・姿勢・態度・声	1 3 5	1 3 5
判定	総合評価・合計得点	点	点

<評価の基準>

[立論]

自分たちの立場を明確に主張しているか。

[反論]

相手の立場の問題点を批判できたか。

[最終弁論]

相手の批判をうまく生かし、自分たちの立場の正当性を述べられたか。

★ 勝敗を決める要因は、どちらがよりよく聴衆を納得できるかにある。

(5) ディベートの教育的効果

① 客観的分析力がつく

物事には常に表裏両面がある。ディベートで争点の両面をみなければ勝てない。ひとつの問題の両側面をみることで、自説の欠陥もみえてくる。相手の言い分も理解できる。議論はそこから始まるのである。教育ディベートでは、肯定・否定両面に立つことを要求される。客観的観察・分析力を養うには、格好の訓練ともなる。

② 論理的思考力が身につく

議論に勝つには、自説の正当性を主張するのみならず、相手の反論にも応えていくことも必要である。Why - Because の論理・分析する能力が欠かせない。ディベートは、議論の訓練をとおしてこれらの力を鍛える。

③ 発表力が身につく

ディベートとは、肯定側・否定側・審査員（聴衆）この三者間のコミュニケーションである。肯定側と否定側、どちらがよりよく説得することができるかが勝敗の分かれ目となる。優れた論理は、簡潔で巧みな説得術となって発表力を身につける。

④ よりよい聞き手になれる

ディベートは、さらに人の話を聞く能力を高める。なぜなら、ディベートは、物事の両面をみる習慣を身につけさせてくれるからである。つまり、自ずと他人の見解に対して寛容になれる。

⑤ 情報収集力が身につく

ディベートに情報は欠かせない。ディベートでは、自己の主張（claim）を支える資料が不可欠である。ディベートはあふれる情報の中から、真に必要なものだけを取捨選択する力を鍛える格好のトレーニングとなる。より説得力のある資料を探究する心——これが、事実をみる目も鍛えている。

*ディベートは、理詰めには走ったり、強引に自己を正当化しようとする傾向がでてくる短所もあるが、各自の立場で議論を展開、批判、意志決定するので、従前の討論より得る力は大きい。

Ⅶ 授業実践（検証授業）

学 習 指 導 案

平成5年6月17日（木） 4校時

港川中学校3年1組（男15人 女21人）

指 導 者 嘉手納 千賀子

1 単 元 名 「日本国憲法と基本的人権」

2 単元のねらい

- ・人間尊重としての憲法の3つの柱の考え方を理解する。
- ・基本的人権は日本国憲法の基本的原則であり、自由で幸福で人間らしい生活を実現しているものであることを理解する。国民主権の考え方もこの観点から位置づける。
- ・自由および権利は、国民の不断の努力による法の保持で保障されることを実感させる。

3 全体指導計画 — 11時間

- ・憲法の三つの柱（憲法の考え方）————— 1時間
- ・平和主義————— 1時間
- ・国民主権————— 1時間
- ・基本的人権の尊重————— 3時間
 - 1—自由であること
 - 2—人間はみな平等
 - 3—社会生活と人権……………（本時の授業）
- ・人間らしく生きることのできる社会(1)(2)—— 2時間
- ・人権を保障するための権利————— 1時間
- ・人権の新しいひろがり————— 1時間
- ・自由と責任・権利と義務————— 1時間

4 生徒の実態

中学の時期的なものもあろうが、生徒は受動的学習に慣らされすぎて、授業の中でなかなか、発言・発表をしたがらない。たとえ問題にこたえる事ができても、追求されるとすぐに発言を放棄してしまう。自分の考えを自分の言葉で文章にまとめる作業も相当難儀のようである。社会的事象（時事問題）には興味あるが、それらを主体的に捉えなおす学習経験はよわい。しかし、生徒の世界観は確実に外に広がり、批判精神も身につけてきている。

5 本時指導の実際

- (1) 題 材……………基本的人権 — 社会生活と人権（3／3）

(2) 本時の教材観

- 個人の尊厳と平等を、差別意識の構造をとうして考え、憲法の基本的精神について理解する。
- 人権問題で一番大切なことは、主体者として社会的事象を自分の視点で捉えなおしてみることである。ぼんやりとした関心が差別意識を創り出すこともあるので、すでにある価値観も自分の頭で主体的に捉えなおす事が大切である。他人の考えをうのみにする態度が、何よりも問題である。
- 人権の一番の問題は差別であることを基に「法の下での平等」を考え、権利実現のための不断の努力の難しさと大切さを理解させる。

(3) 本時指導案の構成

- ① 学習内容………婚姻届け出用紙で氏選択の書く作業をとうして、自分の意識を探り、法の下での平等、日常生活のありかたを考えさせる。
- ② 授業仮説………身近な社会的事実や事象へ自分をくぐらせ、それぞれの立場で思考、立論、反論する事により、問題意識が持て、主体的な生き方が創られるだろう。
- ③ ねらい………意見を対立させるのではなく、反対論を聞く事により自分の思考力を高めるようにする。すべての尊厳ある個人の存在を、法の実体（権利の保持）としてではなく「不断の努力」によって権利を実現していくもの、という意識が創られるようにしたい。

(4) 評価

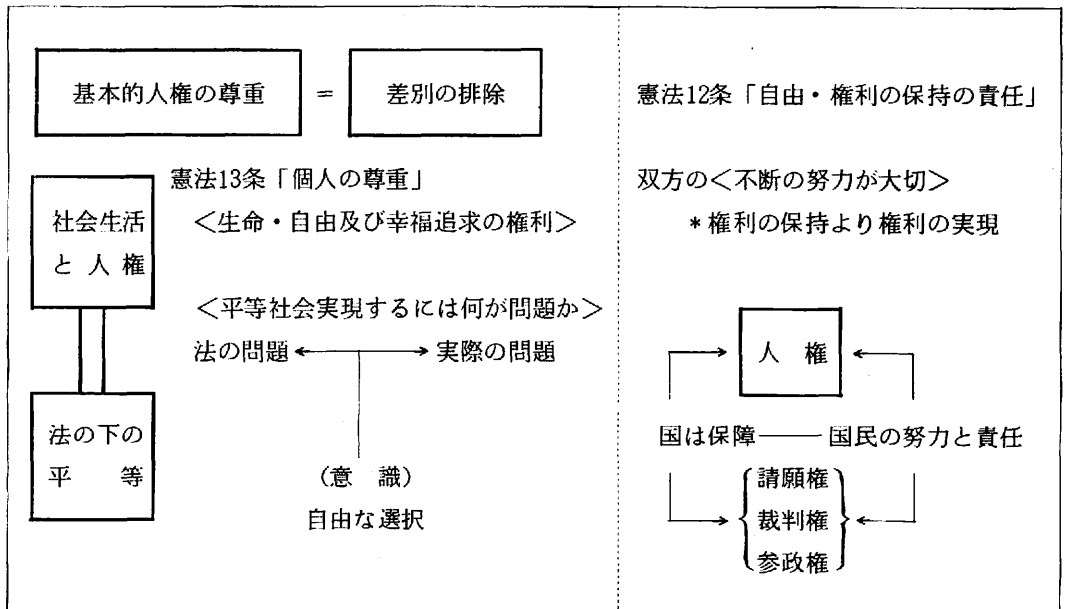
- 討論をとうして、問題意識が持て、憲法の「不断の努力」の意味を実感できたか。
- 相手の意見を聞いて、自分の考えを深めることができたか。
- 意欲的に学習に参加できたか。

6 本時の指導案

		発問と学習活動	資料機器	指導の手立てと予想
10分	作業	<p><復習> 婚姻最低年齢の男女差に差別は見られるか。言語に残る差別はないだろうか。</p> <p>1. 婚姻届けを書こう。 ○ 婚姻後の氏についてどうするか。 ○ だれの氏を書きましたか。</p> <p>* 挙手で意思表示をする。</p>	<p>プリント 憲法・民法・社会科意識調査(OHP)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 婚姻後の氏は男女どちらの氏を名乗ってもよいことを確認する。 ・ OHPで婚姻届けの書き方を例示 * 社会科意識調査の結果をみせる。 <p><予想> 挙手で男女の人数確認 夫の「氏」を名乗るのが多いだろう</p>

30分	つかむ	<ul style="list-style-type: none"> * 一般的考えと親の考えはどう違う。 2 「婚姻後は男性の氏を名乗るべきである」 * それぞれの立場から論じる。 ◦ 肯定側立論→否定側による尋問 ◦ 否定側立論→肯定側による尋問 <作戦タイム> ◦ 否定側反駁→肯定側反駁 	プリント (親の考え) 持ち時間 各5分 各5分 1分 各3分	<ul style="list-style-type: none"> • 各々の立場を設定して討議させる 3列ずつの2グループにわけろ。 * それぞれの立場から論じさせる。 <法と実際の差異が差別の壁か?> • 論証過程を通して何が問題になっているかを実感としてつかませる。 ┌ 選択自由はある — 法は問題ない └ 現実の選択 — 実際の選択は困難
5分	深める	3 「氏」問題から男女の平等又は、差別解決のための提案をしよう。 ◦ ノートに書いてみる — 数人発表		自由なわたしの選択・判断とは何か 何が問題になるかをつかませる。 解決の方法を考えさせる。
5分	まとめ	4 <授業の流れをみて必要なら> 教師でまとめ — 確認する。 国民の「不断的努力」の意味を考えさせる→権利保障のための法		<ul style="list-style-type: none"> • 平等社会を実現するには法と人の両方の努力が大切な事を理解する。 ┌ 憲法12条「不断的努力」の意味

<板書事項>



VIII 授業実践の記録と考察

(1) 論 題 < 婚姻後は夫の氏をなすべきである > — 考えさせたかったこと —

平等の問題は、いかに差別を排除するかである。差別の悪は、誰もが知っている事である。ところが、差別意識がどこから来るかについては、日常生活であまり気づかないでいる。法で保障されている自由・平等を知識として蓄えるだけではだめで、実際の社会において、すべての人が、自由を享受できるために「不断の努力」が不可欠である。それは、具体的にどんな行動をさすのか。法と実際社会の間で、選択をせまりながら、その意識に揺さぶりをかけたかった。

	授業記録<論争の様子>	反省と動き
肯定側立論	<p>A. 男の人は、祖先を守らなければいけない。昔から男性の氏をとってきたのだから、祖先を残す為に男性の氏をとる。だから、やたらと氏を変えてはいけない。理由がないかぎり社会的に便利だから。</p> <p>B. 男の人のだいたい、結婚しても仕事を続けるので、その時もし氏を変えたら仕事がスムーズにいかないと思う。</p> <p>C. 男が会社で働くには、自分の氏をなの方が都合がいい。</p> <p>D. 結婚すると、女はやっぱり男の氏をとるべきだと思う。そのうち、お墓や仏壇の問題がでてくるから。後々の問題を考えると、最初から男の氏をなの方が楽ですよ。今の時代は、男の氏をなるのがほとんどです。</p>	<p>(授業者反省)</p> <p>E→Dへの反論のとき、この発言は妥当ではない。「～だから～してもよいはずだ」と言わないおす反論に導くべきであった。</p> <p>Aの下線部の発言をうまく利用できる、援助をするべきだった。</p>
否定側反論	<p>A. もし女の氏をとったら、女の権力が強そうに見える。それと、養子ももらうんだったら氏を変えてもいいが、その他の考えだったら変えない方がいいと思う。</p> <p>H→B Cへの反論</p> <p>さっき、夫の氏をなるのが都合がよいと言ったが、その為に妻は自分の氏を捨てる必要はない。と思う。</p> <p>G. あかの他人だし、血もつながっているわけでもないのに、名字を変える必要はない。</p> <p>E→Dへの反論</p> <p>夫婦はもともと他人なのだから、別々のお墓でもいいのではないかと。夫の氏をとった場合、女は全然知らない人達のお墓に入りますか、死んだら、自分の親の墓に入ってもいいのではないですか。</p> <p>F. 法律では、どちらでもよいとあるのに、どうして男性の氏にこだわるのか。法律と現実が違う。</p>	<p>E→Dへの反論のとき、肯定側から意味が分からないという、ざわめきの声が出る。↓</p> <p>私は自分の親の墓になりたいと主張したかったようだが相手に伝えきれず悩む。</p>

	H. 氏だけがすべてではない。社会に便利という事だけで、女が氏を捨てる理由はない。	(授業者反省) Fの論題設定の指摘は妥当だ。
否定側立論	F. 人々は、みな平等であるのに、『男性の氏をなのるべき』というのは女性差別をしていると思う。時と場合によって、決めればよい。 H. 女性にだって、氏を選ぶ権利はあるし、男の氏を押しつけられる今は、男女平等になっていないと思う。 G. これは、男女差別で絶対おかしい。 E. 結婚というのは、あかの他人どうしがするのであり、血がつながっていないので相手の氏をなのることはない。名字を捨てる必要はない。	論題を再考する必要がある。 C→EHへの反論のとき、教室が『オーッ』と少しどよめく。
肯定側反論	C→EHへの反論 男も名字を捨てる必要はない。 《肯定側反論が続かないので否定側の要求で再反論させる》	→Y→Hへの反論で『そんなことまで、考えなかった』という。ざわめきが聞こえる……………
	H→Cへの再反論 自分は、女性の名字をなのれとは言っていない。わざわざ、男の名字をなのる必要はない—と言ってるだけであって、女の氏をなのれとはいっていません。 Y→Hへ質問 それでは、夫と妻の名字が違うときは、子供はどちらの名字をなのればよいのですか。 H→Yへすかさず答える。 20歳までは、親が決めて、20歳を過ぎたら子供に選ばせたらいい。 Y→Hへ質問 どうして、20歳になったら、選ばせるのですか。 H→Yへ答える それは、20歳になったら法では、選挙権が与えられたり、成人になっているからです。	反論が質問に変わり、感情論になっている。 —中断— <名前って何> *OHPでアメリカの名前を例示—この名前の表し方で、どんな事がわかるかを全体で考える 出身国・誰の子

討論を終えて生徒は、平等社会なのだから双方の合意で決めるべきとしながらも、実際の選択場面では悩む派と、現在の制度を特別に変えなくてもよい肯定派に別れた。かなり、突っ込んだ意見もでたが、十分に吸い上げきれなかった。生徒は当然と考えていた事柄を突きつけられ、法理論と現実社会の中で悩み揺れた。又、自分の思う事を理論立てて主張する難しさを感じたようである。

(2) 「討論を終えて」の生徒の反応から

よかったことは、緊張感があったこと。グループを組んでやった方がいい。

氏がどんなに大切か分かった氏をなのるだけで、こんなに考えるとは思わなかった。

もっともっと、いろんな知識を頭に入れて、臨機応変に出来るようにしたい。

言いたい事が通じなかった。自分の意見をはっきり言う。

男の氏をとるのが正しいと、納得させるため、なにを言えればいいのか考えた。

授業で良かったことは意見が言い合えて、いろんな考えを考えさせられた。

賛成の人（相手側）をどうやって、納得させるか、考えた。

最初が分からなかった。理論は大切。反論を考えていた。討論できた。

氏の選び方でいろんな事を考えさせられた。氏についてどちらがどんな理由でいい？

個人の考え、自分のしらない事がわかった。自分がどちらを選べばいいか考えてしまった。

身近な事でこんなに悩むとは思わなかった

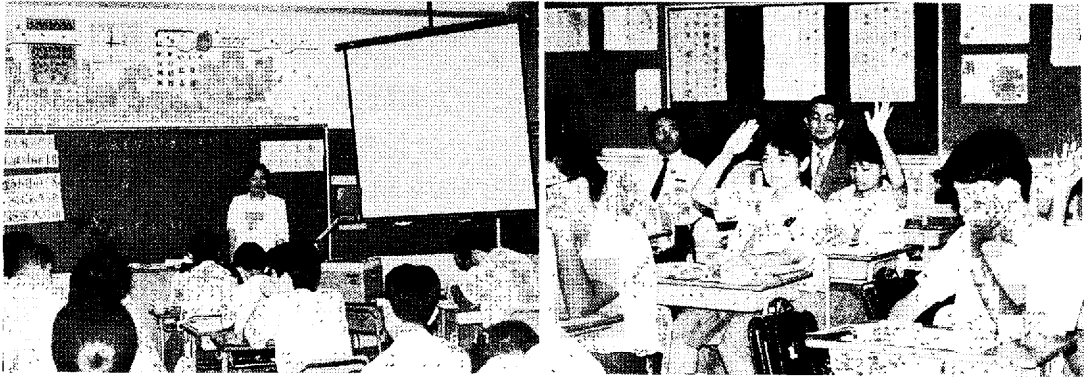
言い合いは、いつもの授業より楽しかった

ディベートで生徒が悩み考え始めた

これまでは「どっちでもいいんじゃない。」と、話を終わらせがちで、対立場面があってもなかなか討論を発展させることが難しかった。しかし、この討論形式で、生徒は悩み動き始めた。『どう言えば相手に分かってもらえるか』『どのように、問いかけたらいいか』と相手を説得したり、反論するために迫られて悩み、苛立っている。『もっと知識を蓄えなくては』と考えている。しっかり聞くことも要求されるし、それが、緊張感をもって討論に参加する楽しさにも繋がっているようだ。それから、各自の立場で論を張っていくので、客観的に自己を見つめ、相互の考えの差異にも気付く事ができた。更に、『何とかしなくては』という思いは、理論・反論の難しさと同時に、挑戦の気持ちを感じ、学習への高まりも自覚していったようだ。

(3) 生徒の声

- ① 「言い合えた」「もっと、意見をだして言い合えたら良い」と考えており、言い合える授業は緊張感があって、楽しいと7割の生徒が考えている。
- ② 「授業中、助けあえなかった」から、班を作って発表することを、提案している。



(4) 検証授業の反省

- ① 導入に時間がかかり、予定の半分しかこなせなかった。
- ② 論ずる具体的方法、ルールを事前に知らせる必要があった。
- ③ 授業は今までの討議ではなかったので「この考えは、こういう点がおかしい。反対です」とその仕方を援助していくべきであった。
- ④ 話し合いでのいきづまりの心配、生徒の論立てを容易にしようと資料を作りすぎた。
- ⑤ 班を作って発表することも考えたが、班リーダーが育ってない現状では、実際には、班はあっても個人発表になるおそれがあったので採り入れなかった。作戦タイムの時に席周辺で話し合いをさせるつもりであったが、時間切れ。生徒の指摘するように、班があると論を張るのに自信とゆとりができ、活発に話し合えただろう。
- ⑥ 論題の分析の大事さと、題材の設定次第では、なかなか発言しない生徒でも動きだしそうである。又、考える時間を与えた際に、忍耐強く待つ難しさを改めて痛感した。これまでの授業の型を思い切って見直すきっかけになった。

(5) 感想・意見

- ① グループを作り、発言させるほうがよい。
- ② 墓についての発言から、結婚と墓について論じさせてもよかった(墓からみる女性の位置)
- ③ 生徒は資料が多すぎて、何をみてよいかわからなかったようだ。

IX まとめと今後の課題

<まとめと成果>

主体的に社会に関わって生きる態度をどう育てるか。そのための討議学習をどう活性化していくか、という授業の悩みをかかえ模索してきた。時事問題の好きな生徒達。それを、その場限りの興味に終わらせず、常に課題を持って生きながら主体的に判断し、且つ自己変容のエネルギーにまで高めていって欲しいと考えていた。新聞を読む週間。スクラップブックも兼ねたノートづくりとコメント添えは、まだ少人数だがかなり内容的によいものが見られた。ディベートによる討議学習では、論題分析の重要さと難しさを、改めて痛感した。また生徒には、今までにない悩みや動揺がみられた。疑問を抱いた時、物事を理解する一歩がある。ディベートというには、不十分であるが、人の意識は、葛藤し悩みくぐり抜けたとき作られることを思えば、授業で悩み揺れた生徒の有り様は、これからの私の授業姿勢のよいスタートになった。

<今後の課題>

- (1) 社会的事象の題材を集め、ディベートできる論題づくりと、発問援助の研究を続けたい。
- (2) 生徒のノートを授業において、どう効果的に活用していくか考えていきたい。
- (3) 評価と授業活性化を図れるグループづくりの工夫。

授業で使える社会的事象の題材集めと、その論題づくりは、今後の私の大きな課題としたい。それから、討議時間における教師の発言量を徹底して減らし、効果的発問援助を考えていきたい。時間を与えた時は、あせる気持ちをおさえ、しっかり待つこと。その待つ忍耐をつけたい。社会に主体的に関わって生きる姿勢は、生徒の自主性を尊重するところからつくられる。実践授業では、「生徒にまかせる授業」の大切さとその意味を、改めて考えさせられた。

X 参考文献・引用文献

<参考文献>

- ・学校における教育研究のすすめ方 群馬県教育研究所連盟 昭和62年刷発行
- ・中学校新教育課程実践指導事例集 社会2年 佐藤照夫・星村平和・篠原昭夫編 第一法規
- ・社会科教育（月間誌）1993年456月号—明治図書
- ・紀要122号社会科学学習に関する実態調査（中学校） 那覇市立教育研究所 昭和57年3月
- ・社会科公民のキーワード（4） 茂木 喬 著 明治図書 1993 年版刊
- ・「ノート」で自主学習をどう育てるか 斉藤喜門他4名 明治図書
- ・社会科の主体的学習 木戸 保 著 1974年版刊
- ・授業技術としての話し方入門 6
よくわかる発問・説明・助言の技術 渥美利夫 著 授業技術研究所編 1983年再版刊
- ・自己教育力で育てる授業づくり 加藤幸治 著 黎明書房 1989年 刷発行

<引用文献>

- ・やさしいディベート入門 松本道弘 著 中経出版 1992年 刷発行
- ・授業ディベート入門 岡本明人 著 明治図書 1992年 初版刊

<此の立場は「既婚・既女」です。> (該当しない) 氏・私の考えは「既婚・既女」です。>

既婚既女の学習状況記録

既婚既女の学習状況記録

作業タイムの時の記録

投票を終えて

3年1組	高	氏名	
------	---	----	--

11枚目の投票で、あなたの思うことに最も近い数字の段に○をつけてください。

と
ど
も
ら

(既婚)	2	1	0	-1	-2	(既女)
①わかった	2	1	0	-1	-2	①わからない
②楽しい	2	1	0	-1	-2	②楽しくない
③考えた	2	1	0	-1	-2	③考えない
④結び合った	2	1	0	-1	-2	④結び合わなかった

四 今日投票でよかったなと思うことはどんなことですか。

四今日の投票で良かったなと思ったことは何ですか。

四(適合)の場面でもっと工夫したいことは何ですか。

四今日の授業で学習協力して学習できましたか。
(はい) (いいえ)

四まよりの授業で学習したこと、考えたことを書いてください。
その他、あなた自信でなにかありましたら書いて下さい。

<学習したこと>	<考えたこと><その他>

社会科調査	年 組	男 女	名前
-------	-----	-----	----

投票の資料として使います。自分の気持ちにそって書いてください。
(1) あなたは男と女は平等としますか。(はい・いいえ)
(いいえ)と答えた人は、不平等と思うことを書いてください。

(2) 何才から結婚できると思いますか。(男 オ・女 オ・男女同じ オ)

(3) 結婚の際にどちらの氏を名乗ってほしいですか。(はい・いいえ)

(4) 氏を決める時に、どちらか一つを選ばうとき二人で話しあって決めたいですか。(はい・いいえ)

(5) 氏を決め方で何か良い方法があったら提案してください。

(6) あなたは、次に生まれかわるとしたらどちらを選びますか。(男・女)

(7) 下記の語句について答えてください。

語句	○をつけて選ぶ	イメージ	○をつけて選ぶ
主人	男・女	自由	男・女
夫人	男・女	平和	男・女
未亡人	男・女	大地	男・女
思人	男・女	英語の意味を書いて下さい。	
奥人	男・女	MAN (2つ)	
秀才	男・女	WOMANN	

投票の評価
とど
も
ら

<教師について>

1 授業の内容は適切である	2	1	0	-1	-2	適切でない
2 発問の内容は適切である	2	1	0	-1	-2	適切でない
3 発問の時間は適切である	2	1	0	-1	-2	適切でない
4 板書の内容は適切である	2	1	0	-1	-2	適切でない
5 説明の内容は適切である	2	1	0	-1	-2	適切でない
6 問の振り方は適切である	2	1	0	-1	-2	適切でない
7 指示、視示が明確である	2	1	0	-1	-2	明確でない

<生徒について>

8 説明や意見をよく聞いている	2	1	0	-1	-2	理解していない
9 発言に積極的に取り組み	2	1	0	-1	-2	取り組んでいない

<授業全体として>

10 授業・学習過程は適切である	2	1	0	-1	-2	適切でない
11 授業は盛まっている	2	1	0	-1	-2	盛まらない